

カナダ・ブリティッシュコロンビア州のバンクーバー島カウチンバレーにおけるワイナリーの発展にみる農村空間の商品化

菊地俊夫*・兼子 純**・田林 明***・

仁平尊明****・トム ワルデチュック*****

*首都大学東京都市環境科学研究科, **愛媛大学法文学部, ***筑波大学名誉教授,

****北海道大学文学研究科, *****トンプソンリバース大学文学部

本研究はカナダ・ブリティッシュコロンビア州のバンクーバー島のカウチンバレー地域におけるワイナリーの発展とそれとともなう農村空間の商品化の地域的な特徴を明らかにした。カウチンバレーの16のワイナリーは大規模ワイナリーと中規模ワイナリー、および小規模ワイナリーに類型化できる。この地域では、小規模ワイナリーから大規模ワイナリーまで相互に結びつくことにより、ワイン産業のブランド力が高まり、ワイン産地の競争力が強化された。さらに、ワイナリーと地元農産物の生産農場とが結びつくことにより、農村空間の商品化も発展するようになった。いずれにせよ、カウチンバレーのワイナリーは新規就農者の農場購入とワイン生産や農村居住への憧れからはじまり、経営者のワイン生産のこだわりや情熱、および農場間のネットワークの構築によって農村空間の商品化の中核となってきた。

キーワード：カウチンバレー、農村空間の商品化、新規就農者、大規模ワイナリー、中規模ワイナリー、小規模ワイナリー

I はじめに

農村空間の商品化には、「生産」の場としての商品化と、「消費」の場としての商品化がある。第二次世界大戦後、多くの先進国では生産主義的な考え方に基づいて、「生産」の場としての農村空間の商品化が進められてきた（田林, 2013）。つまり、農牧業は経済的な利潤を最大化することを優先し、化学肥料や農薬を多投して単位面積当たりの生産性が高められるとともに、より収益性の高い作物や家畜が生産されるようになった。また、農業の機械化や効率化、および大規模化や専門化も進められ、農村空間の「生産」の場としての商品化は著しく進んだ（Wood, 2005; 田林ほか, 2009）。その一方で、大規模化や専門化、あるいは機械化や効率化が困難な農業地域もあり、それらは条件不利地域や中山間地域として農業の衰

退が顕著となった（Cloke, et.al. 2006; 山本ほか, 2013）。

農村空間を「生産」の場として商品化できない地域では、1990年代以降、ポスト生産主義的な考え方に基づいて、「消費」の場としての商品化が進められるようになった。これは、農村空間を余暇やツーリズム、あるいは憩や癒しの場として活用するもので、農村固有の環境や生活文化が商品として発信されるようになった（Essex, et.al. 2005）。農村空間を「消費」の場として捉えた商品化のタイプには、レクリエーション・観光型、農村居住型、景観・環境の維持による生活環境の向上型、および景観・環境の維持による余暇環境の向上型があり、いずれも農村空間の環境資源を商品として評価して活用することに共通した特徴がある（田林, 2015）。特に、農村空間における観光やレクリエーション、および余暇は「消

費」の場としての商品化の典型的な様相でもある (Robinson, 2004)。

農村空間の「消費」の場としての商品化に関して、ワインツーリズムは典型的な現象である。それは、ワインツーリズムが先進国において着地型観光のひとつとして確立され、それぞれの農村の創意工夫によって発展できるためである (Torres and Momsen, 2011)。そのため、先進国における各地の農村は1990年代以降にワインツーリズムによって地域振興を図るようになり、ワインツーリズムは農村空間の商品化の鍵となる現象にもなっている (Croce and Perri, 2010)。ワインツーリズムは醸造用ブドウの栽培適地であることを基本的な条件にしているが、単純にはワイナリーとそれに付随するブドウ園の基礎的単位がいくつか組み合わされることによって成立する (Hall et.al. 2000)。したがって、ワインツーリズムやそれに基づく農村空間の商品化にはワイナリーとそれに付随するブドウ園の分析が不可欠である。さらに、ワイナリーとブドウ園の基礎的単位の集積とそのワインツーリズムとしての展開は、地域の土地条件や気候、および歴史・文化環境や社会・経済環境と密接に関連しており、地理学の重要なテーマにもなっている (Dougherty, 2012)。本研究は、カナダ・ブリティッシュコロンビア州のバンクーバー島カウチンバレーにおけるワイナリーの発展を分析し、ワイナリーの発展にともなう農村空間の商品化の仕組みを明らかにすることを目的とした。

カナダ・バンクーバー島のカウチンバレーは、最高気温が5℃から25℃、最低気温も0℃から10℃で推移して比較的温暖であり、無霜期間も約170日と比較的長いため、醸造用ブドウ栽培には適している。農地の土地条件も氷河によって侵食されて作物栽培の生産性は高くないが、醸造用ブドウ栽培にはほとんど影響はない (Cowichan

Region Economic Development Commission, 2010)。そのため、カウチンバレーの農業では、あまり肥沃でない土地条件を反映して、牧草栽培とそれに基づく家畜飼養が基本的なタイプとして伝統的に継続されてきたが、1990年代以降、家畜飼養農場の減少とともに、ブドウ栽培農場が増加している。これは、カウチンバレーの環境が醸造用ブドウの栽培に適していることを反映している。以下では、カウチンバレーにおける地域農業の推移を概観し、醸造用ブドウ栽培やその生産農場の展開を明らかにする。

II カウチンバレーにおける地域的課題と農村振興

カウチンバレー・リージョナル・ディストリクトは農業センサスの統計区として、バンクーバー島南部の東海岸から西海岸にまで及ぶ35万haの広大な地域であるが、そこでの保全農地 (agricultural land reserve) は3万3,200haと全域の9.5%を占めるにすぎない。また、カウチンバレー・リージョナル・ディストリクトの保全農地は東海岸の平野や海成段丘面、およびそれらに続く波浪状の低丘陵地に集中して分布しており、地域の中央部から西海岸にかけての山間部には、保全農地はほとんど展開していない (図1)。したがって、本研究で扱うカウチンバレーは、統計単位としてはリージョナル・ディストリクトを範囲とするが、実証研究の範囲としては保全農地が集中して分布する東海岸地域とする。カウチンバレーの農地は標高200mまでに展開し、温暖な気候と無霜期間の長さ、および適度な降水によって、良好な作物栽培や果樹生産の環境がつけられてきた。しかし、著しく解析された海成段丘面や氷河によって浸食された丘陵地は、作物の生産性に影響を及ぼしてきただけでなく、個々の農場の規模拡大を阻み、大規模農場の展開を難しいものにしてきた (Ministry of Agriculture and Lands,



図1 カナダ・ブリティッシュコロンビア州のバンクーバー島におけるカウチンバレー・リージョナル・ディストリクトの位置と保全農地
(Ministry of Agriculture and Lands (2008) により作成)

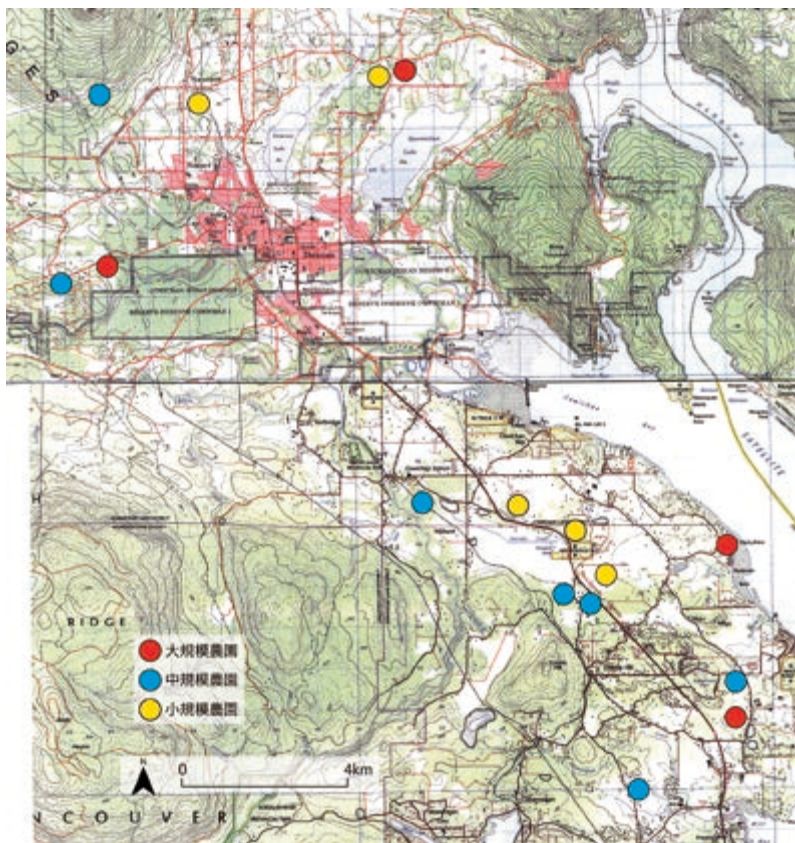


図2 カナダ・バンクーバー島カウチンバレーにおける類型別ワイナリーの分布 (2015年6月)
(現地調査およびHynes (2011) により作成)

2008 : Cowichan Region Economic Development Commission, 2010)。

カウチンバレーの農地面積と農場数の推移を表1に整理した。これによれば、農地面積は1986年に約1万7,300haあったが、それ以降減少し続け、2011年には約1万800haになってしまった。これは、カウチンバレーが大市場から遠距離にあることや、農場の規模拡大や生産性の向上を拒む土地条件などを反映して、多くの農場が1980年代から1990年代にかけて中止を余儀なくされた結果でもあった。このことは、カウチンバレーの農場数にも反映されており、1986年の農場数は減少して554であった。しかし、1990年代になると、新規就農者が農場を購入して経営を開始するようになり、農場数は1991年の594から増減を繰り返しているが、2006年の700、そして2011年の685と安定して推移する傾向にある。このような農場数の安定した推移は、カウチンバレーの農村再編と新たな商品生産の台頭を示唆している。しかし、1農場当たりの農地規模をみると（表1）、1986年の31.2haから減少する傾向にあり、2011年には15.8haと農場経営の零細性は地域の特徴として変わっていない。むしろ、新規就農者が蓄えた手持ちの少ない資金で農場を購入するため、

農場経営の零細性は強まっている。

次に、農場経営の内容を検討するため、主要作物別の栽培面積とその生産農場を表1にまとめた。最も広い農地利用は飼料作物栽培であり、2006年で3,853haに及んでおり、276農場（全農場の約40%）が飼料作物を栽培していた。この飼料作物は牛（乳牛と肉牛）や羊、および馬に給餌する目的で栽培されており、それぞれの家畜を飼育する農場は280と112、および182であった。飼料作物の栽培面積や家畜飼育の農場数に大きな変化はないため、カウチンバレーの農場における伝統的な商品生産の家畜飼養は全体として継続しているといえるが、近年の傾向としては羊の飼育が減少し、馬の飼育が増加する傾向にある。これは、小規模農場が農村観光や都市住民の余暇活動と関連して、単位面積当たり高収益な家畜飼養として馬の飼育を行うようになったためである。

野菜の栽培面積の増加傾向は目立つものではないが、野菜栽培の農場数は1986年の30から2006年の84と大幅に増加している。また、果樹栽培の農場も増加傾向にあり、2006年には130農場を数えている。果樹栽培の面積も1986年の65haから2006年の172haと大幅に増加している。野菜栽培や果樹栽培の農場とそれらの栽培農地が増加傾

表1 カウチンバレー・リージョナル・ディストリクトにおける農地面積、農場数、および主要作物別収穫面積とその栽培農場数の推移

	農地面積 (ha)	農場数	農地面積あたりの 農場数	主要作物の収穫面積と生産農場										家畜頭数と飼養農場					
				飼料作物		果樹(ブドウ除)		ブドウ		野菜		養鶏		乳牛・肉牛		羊		馬	
				農場数	収穫面積 (ha)	農場数	収穫面積 (ha)	農場数	収穫面積 (ha)	農場数	収穫面積 (ha)	農場数	羽数 (羽)	農場数	頭数 (頭)	農場数	頭数 (頭)	農場数	頭数 (頭)
1986	17,261	554	31.2	289	3,769	90	64	7	1	30	50	280	394,548	331	11,603	117	3,002	127	429
1991	18,628	594	31.4	279	4,449	98	66	13	14	41	29	236	231,022	311	13,315	132	3,464	144	512
1996	13,656	772	17.7	300	4,031	166	97	28	35	78	37	291	414,722	351	12,214	145		186	718
2001	13,996	691	20.3	306	4,676	89	91	29	52	75	55	288	377,256	264	11,674	126	2,958	148	704
2006	11,559	700	16.5	276	3,853	95	97	35	75	84	63	280	281,003	230	10,174	112	2,274	182	876
2011	10,837	685	15.8								88	289	209,881	194	9,569	129	2,826	155	714

(Cowichan Valley Regional District Agricultural Overview, および Agriculture in Brief により作成)

向にあるのは、新規就農者の流入と無関係ではない。新規就農者が購入できる農場は小規模農場、ないしは細分化された農場である。それらの農場で収益をあげるためには、単位面積当たりの収益性の高い商品生産が選択されるとともに、農地の集約的な利用が必要になる。つまり、新規就農者の多くは高収益な商品生産として野菜や果樹の栽培を選択したといえる。とりわけ、野菜栽培は多毛作を行うことにより、農地の高度利用が可能になり、小規模な農場経営者にとって重要な商品生産になっている。

果樹や野菜のなかで、農場数や栽培面積が最も増加した商品生産はブドウ栽培であり、それらのほとんどは醸造用である。1986年におけるブドウ栽培の面積と農場はそれぞれ1haと7であったが、2006年になると75haと35に増加した。つまり、カウチンバレーにおけるブドウ栽培とワイン醸造の歴史は1980年代後半にはじまったばかりであり、その担い手も新規就農者であった。新規就農者の多くは、カウチンバレーの風土（日照時間や無霜期間など）が醸造用のブドウ栽培に適していることを認識し、ワイナリーの経営を開始した。しかし、ワイナリーに付随した農場はカナダのオカナガン地域やオーストラリアのハンターバレーと比べると小規模である。これは、新規就農者の田園生活や家族とともに居住する農村への憧憬を具現化したものと位置づけられることができ、経済的利潤の追求よりも非経済的利潤（生きがいや癒し、あるいはこだわり）が優先して追求されていたことを示している。このような非経済的な利潤の追求はワイナリーの経営やそれを核とする農村空間の商品化にも反映されている。

以下では、カウチンバレーのワイナリー経営に焦点を当て、ワイナリー経営の特徴とその地域的展開について検討する。

Ⅲ カウチンバレーにおける類型別ワイナリーの特徴と立地展開

1. ワイナリーの諸類型

カウチンバレーには、16のワイナリーが立地している。それらのワイナリーがブドウ畑の開園とともに操業を開始したのは、1988年から2008年にかけてであり、ほとんどの創業者はブドウ栽培やワイン醸造の経験者ではなかった。多くの創業者は港湾労働や農業機械販売の営業、あるいは物流の担当者として会社勤務し、農場購入の資金を蓄積した（Hynes, 2011）。1980年代後半から2000年代前半にかけて、カウチンバレーでは農業を中止し、離農離村する者が少なくなかった。これは、カウチンバレーの農場が小規模であることに加え、有力な商品生産が欠如し、農産物市場への近接性も改善されることがなかったためである。いわゆる、カウチンバレーはカナダ・ブリティッシュコロンビア州の農村における条件不利地域として位置づけられていた（Cowichan Region Economic Development Commission, 2010）。このような条件不利地域であるため、他業種からの新規就農者が比較的容易に農場を購入することができたといえる。

新たに農場を購入した就農者は、小規模な経営で比較的高い収益を上げることができる商品生産を行い、その一つに醸造用ブドウの栽培を含めたワイナリーの経営があった。カウチンバレーの16のワイナリーはブドウ園の規模によって三つのタイプに類型化することができる。すなわち、大規模ワイナリーと中規模ワイナリー、および小規模ワイナリーである（表2）。ワイナリーにおけるブドウ園の規模は、ワインの生産量を規定するだけでなく、ワインの種類や醸造の考え方を反映する有意な指標のひとつとして周知されており（Croce and Perri, 2010）、本研究も類型化の指標として取り上げた。カウチンバレーにおける類型

表2 カナダ・バンクーバー島カウチンバレーにおける類型別ワイナリーの特徴（2015年6月）

ワイナリー		創業年次	ブドウ園 (ha)	赤ワイン					白ワイン					その他		アトラクション				労働力				
				カベルネソーヴィニヨン	メルロー	ピノノワール	シラーズ	シャルドネ	ゲヴェルツトラミニアー	ピノフラン	ピノグリス	ソーヴィニヨンブラン	オルテガ	ロゼ	フルーツワイン	ツアー	試飲	店舗	レストラン	世帯主	妻	後継者	嫁	雇用
大規模ワイナリー	Vi	1990	48	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	●	△	●	●	4
	E	2000	23.2	○	○	○		○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	●	△	●	●	2
	AL	1992	19.2	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	●	●	●	●	2
	C	1990	17.6	○	○	○		○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	●	△	●	●	2
中規模ワイナリー	U	2008	12.8		○	○					○		○				○	○		●	●	×	○	1
	AV	2001	12		○	○			○		○			○	○	○	○	○		●	●	×		2
	Dem	1988	11.2		○	○		○			○	○		○			○	○	○	●		●	○	1
	S	2003	9.6		○	○					○		○				○	○		●	●	×		1
	B	1988	8.4		○	○				○	○		○			○	○	○		●	●	×		
	GL	1998	8.1		○	○			○	○						○	○	○	○	●	●			1
	GO	1994	8	○		○		○			○						○	○		●	●	×		
	DI	1999	7.2			○		○			○							○		●	△			
小規模ワイナリー	Ve	1993	7			○		○					○		○			○		●	●	×		
	R	2004	6.1			○					○		○	○	○	○	○	○		●	△	×		
	Deo	2001	6			○		○			○					○		○		●	△			
	T	2006	2			○					○		○		○			○		●	×			

●：農業・ワイン醸造， △：農業・ワイン醸造+その他の就業あるいは家事， ×：その他の就業あるいは家事・就学（現地調査およびHynes（2011）により作成）

別のワイナリーの分布を示した図2によれば、16のワイナリーはカウチンバレーの海成段丘面から低丘陵地にかけて分散して分布していることがわかる。海成段丘面に立地するワイナリーは、幹線道路（国道1号線）からのアクセスが良好であり、ワインツーリズムの展開が期待されている。一方、波浪状の低丘陵地に立地するワイナリーは、地方中心都市のダンカン近郊にあるが、良質のブドウを生産できるように、南向き斜面や西向き斜面にブドウ園が造成されていた。

大規模ワイナリーは17ha以上のブドウを栽培し、経営主とその後継者を含めた専従の家族労働力が3人以上存在する。それらの他に、2人以上の雇用労働力がワイン醸造やブドウ園管理、あるいは試飲のサービスなどに従事している。また、大規模ワイナリーでは赤ワイン用のブドウが主力

となるメルローやピノノワールを含めて3種類以上、白ワイン用のブドウがシャルドネやピノグリスやオルテガを含めて6種類以上栽培されており、それらのブドウを組み合わせたりして多様な種類のワインが醸造されている。赤ワインと白ワイン以外にも、ロゼワインやブドウと異なる果実（ブラックベリーなど）を用いたフルーツワインも醸造されている。そのため、大規模ワイナリーでは多くのツアーを受け入れ、ワインの試飲と直売を行うとともに、ワイナリー内にレストランを併設して、それぞれのワインに合った食事も提供されている（Hynes, 2011）。

他方、中規模ワイナリーと小規模ワイナリーでは、ブドウ園の規模がそれぞれ10ha前後と7ha前後となる。また、そこで栽培される白ワイン用と赤ワイン用のブドウの種類も、中規模ワイナリー

でそれぞれ2種類から3種類、小規模ワイナリーでそれぞれ1種類となり、醸造されるワインも種類が少なく、限定的なものとなっている。さらに、ワイナリーの労働力に関しても、小規模ワイナリーでは経営主が主にブドウ園の管理やワイン醸造に従事し、中規模ワイナリーになると経営主の妻ないしは後継者が加わる程度である。いずれにしても、中規模ワイナリーと小規模ワイナリーは家族経営の性格を強くもっている。中規模ワイナリーと小規模ワイナリーのもう一つの大きな違いはアトラクションにある。中規模ワイナリーも小規模ワイナリーもツアーの受け入れに消極的であるが、ワインの直売には力を入れている。しかし、試飲サービスは中規模ワイナリーでは行われているが、小規模ワイナリーでは日常的に行われていない。これは、小規模ワイナリーの醸造量が少ないことと、その顧客の多くが常連客や地元客であることを反映している（Hynes, 2011）。

以下では、大規模ワイナリーと中規模ワイナリー、および小規模ワイナリーの典型的な事例に基づいて、それぞれの類型の特徴と立地展開を検討する。

2. 大規模ワイナリー

Cワイナリーはカウチンバレー南部の東海岸の海成段丘面に立地し、農場は氷河堆積物で覆われたモレーン（Cobble Hill）上に展開している。ここは1980年代までファーストネーションの経営するミンク農場であったが、経営の規模拡大や効率化・高度化が難しくなり、ミンクの農場経営が中止された。その直後、先代のカナダ人オーナーが1987年にミンク農場を買い取ってブドウを植栽し、1990年にワイナリーを開業した。しかし、カナダ人オーナーの高齢化と後継者がいないことから、このワイナリーとブドウ園が売りにだされ、現在のオーナーのC氏が2007年にワイナリー

とブドウ園を引き継ぐ形で購入した。C氏は家族（妻と息子）とともにコロンビアからカナダに移民として入国し、バンクーバーでIT産業や食品販売業などの職に従事しながら農場購入のための資金をためていた。C氏の息子はもともとワイン醸造に興味があったため、カナダ入国とともに大学に入学し、ワイン醸造の技術や専門知識を学んだ。彼も卒業後、ワイン醸造会社に勤めるなどして、農場購入の資金を蓄えた。C氏一家はカウチンバレーで売りに出されたワイナリーとブドウ園を2007年に購入し、念願のワイン生産を開始した（図3）。

Cワイナリーのブドウ園の規模は17.6haであり、それはカウチンバレーでは比較的大規模なものとなっている。ワイナリーと農場の経営は世帯主とその息子（後継者）が中心となって行われ、世帯主の妻や嫁などの家族労働力もレストランやワイン販売などに多く活用されている。Cワイナリーでは雇用労働力（2人）も利用されているが、家族経営が基本的な形態となっている。2015年6月におけるCワイナリーと農場の土地利用を図4に示した。これによれば、ブドウ園では多くの種類のブドウがそれぞれ2haから3haまでと少し



図3 カナダ・バンクーバー島カウチンバレーにおける大規模ワイナリー（Cワイナリー）の試飲ルーム

（2015年6月菊地撮影）

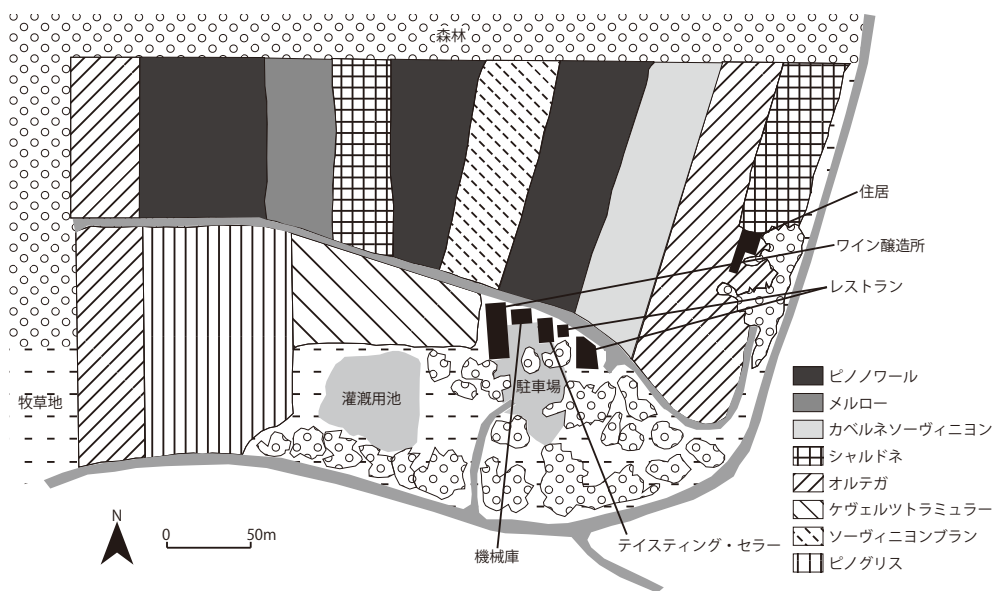


図4 カナダ・バンクーバー島カウチンバレーにおける大規模ワイナリー（Cワイナリー）と農場の土地利用（2015年6月）

（現地調査により作成）

ずつ栽培されていることがわかる。栽培されているブドウは、赤ワイン用としてカベルネソーヴィニヨン、メルロー、ピノノアルなどであり、白ワイン用としてシャルドネ、ゲヴェルツトラミューラー、ピノグリス、ソーヴィニヨンブラン、オルテガである。このように、多種類のブドウを栽培するのは、ドライな味からスイートな味までの、そして重く渋みのある味から軽くさわやかな味までのニーズに応じて多様なワインを生産するためである。ワインの多様なニーズに関連して、Cワイナリーはロゼワインやフルーツワインも醸造しており、ワインの種類はさらに増えている。

Cワイナリーのワインの販路はブリティッシュコロンビア州に限定されているが、その約70%はバンクーバー島の市場で占められており、残りはバンクーバー都市圏である。Cワイナリーのワインは春から秋にかけて毎週開設されるダンカンやビクトリアのファーマーズ・マーケットで直接販売されており、それは全体の販売本数の

10%に満たない。しかし、Cワイナリーはファーマーズ・マーケットで知り合った小売店やレストランに直接ワインを卸すことも少なくないため、ファーマーズ・マーケットへの参加は大きな意義をもっている。また、ファーマーズ・マーケットでCワイナリーを知り、都市住民がまとめて購入するために直接訪ねてくることも多くなっている。このようなワインツーリズムの増加を見越して、Cワイナリーでは試飲や販売を強化するとともに、カウチンバレーのワインツアーを積極的に受け入れている。さらに、農場の一部にレストランを併設し、Cワイナリーの多様なワインに合った料理を提供している。実際、Cワイナリーを訪ねる都市住民は、ブドウ園の広がる農村風景をテラスで楽しみ、好みのワインを飲みながら地元食材の料理をのんびりと堪能し、帰りにお気に入りのワインをまとめ買いしていく。

Cワイナリーを典型例とする大規模ワイナリーは、多種類のブドウから多様なワインを醸造し、

主な顧客である都市住民の多様なニーズに対応していることと、それらの対応が家族経営で行われていることに特徴がある。さらに、顧客の多様なニーズに応えるため、大規模ワイナリーでは「見る」、「飲む」、「食べる」、「過ごす」、「買う」といったアトラクションが一つの農場内で完結していることも大きな特徴になっている。

3. 中規模ワイナリー

AVワイナリーはダンカン西郊の丘陵地（Mount Prevost）に位置し、農場のブドウ園は南斜面から西斜面にかけて広がっている。ワイナリーの経営者のAV氏は内科医としてバンクーバーの病院に勤務していたが、ワイン醸造家の夢を捨てきれず、1996年から5年間、オーストラリアやニュージーランド、そしてカナダのオカナガンバレーのワイナリーでワイン醸造の修業をしてきた。現

在、ブドウが栽培されている4haの農場が2001年に売りに出されていたため、AV氏はそれを購入し、念願のワイナリーの経営を開始した。もとの農場で栽培されていたブドウはピノグリスのみであったが、AV氏は栽培する品種を増やすため、2005年と2009年に隣接した農場を買い足して、農場規模は12haになった。2015年6月におけるAVワイナリーとその農場の土地利用を示した図5によれば、メルローとピノノワールが赤ワイン用のブドウとして、ピノグリスとゲヴェルツトラミューラーが白ワイン用のブドウとして栽培されている。大規模ワイナリーと異なる点は、栽培されるブドウ品種が少なくなり、ワイナリーの経営者の嗜好や考え方やこだわりが栽培品種の決定に影響を及ぼしていることである。

AVワイナリーの基本的な考え方は、風土に合ったブドウ品種を厳選し、特徴的で質の高いワ

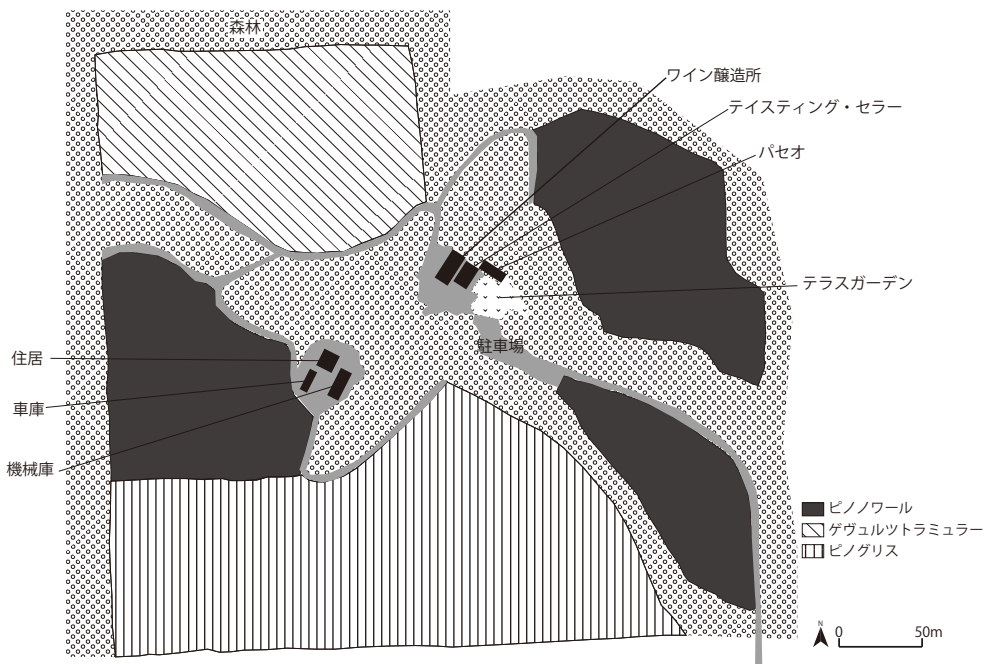


図5 カナダ・バンクーバー島カウチンバレーにおける中規模ワイナリー（AVワイナリー）と農場の土地利用（2015年6月）

（現地調査により作成）

インを醸造することである。AV氏はもともと農場で栽培されていたピノグリスが風土に適した品種と考え、オーストラリアやニュージーランド、およびオカナガンバレーのワイン醸造技術を参考にしながら、カウチンバレー独自のピノグリス・ワインの醸造にこだわってきた。そのため、醸造されたワインは独特なものとして評価されるようになり、AVワイナリーに來なければ手に入らないワインとして周知されるようになった。現在、AVワイナリーの販路はワイナリーでの直販と特約の小売店・レストランなどバンクーバー島に限定されているが、バンクーバーやシアトルなどから訪れて直接ワインを購入する顧客も少なくない。AVワイナリーにとって直接販売が重要であるため、ワインツーリズムを受けいれていることはもちろんであるが、購入したワインをゆっくりと味わってもらい、あるいはゆっくりと試飲してもらう空間としてパティオ（中庭）をつくっている（図6）。しかし、レストランは併設されていない。これは、レストランのライセンスを取得することが難しいことと、ワインだけにこだわる経営主の意向でもあった。

AVワイナリーもAV氏とその妻の労働力が主体



図6 カナダ・バンクーバー島カウチンバレーの中規模ワイナリー（AVワイナリー）におけるワインを飲む空間としてのパティオ

（2015年6月菊地撮影）

となって経営されており、その他に2人の労働力が雇用されている。後継者は別の仕事に従事しており、AVワイナリーを継ぐ意思は現時点でない。そのため、現在の農場規模が適度であり、これ以上のブドウ園の拡大やワインの増産は考えていない。AV氏はワインの量を拡大するよりも、質を向上させることを重視している。AV氏は農場を1ha当たり2万ドルで購入したが、現在、その農場はワイン生産で1ha当たり20万ドルの利潤を生み出している。AV氏はその単位面積当たりの収益がワインの質を高めることによりさらに上昇すると考えている。加えて、AV氏は質の高いワインを豊かな自然環境に囲まれてゆっくり飲むことが、人間にとって至高の癒しであると考えている。そのため、AVワイナリーはパティオのようなおしゃれな空間を来訪者に開放し、ブティック・ワイナリーとしての性格を強めている。

AVワイナリーのような中規模ワイナリーは、ブドウ栽培やワイン生産の規模が小さくなるが、それをメリットに変えるため、質の高い独特のワインを家族経営で醸造していることで特徴づけられる。そのため、来訪者は特徴ある中規模ワイナリーをいくつか訪ねることにより、好みのワインを探すことができる。いわば、中規模ワイナリーは個性豊かな一点物のワインを醸造するブティックのような存在でもある。

4. 小規模ワイナリー

Rワイナリーはカウチンバレーの海成段丘面に続く低丘陵地に立地し、西向きの斜面に6.1haのブドウ園が広がっている。ワイナリーの経営主のR氏はワイン醸造をすることを希望し、バンクーバーでワイン卸会社の営業を続け、結婚後はR氏の妻も同じ会社に勤務しながら農場購入資金を蓄えてきた。R氏夫妻は2004年にカウチンバレーで売りに出された6.1haの牧羊農場を購入し、ブド

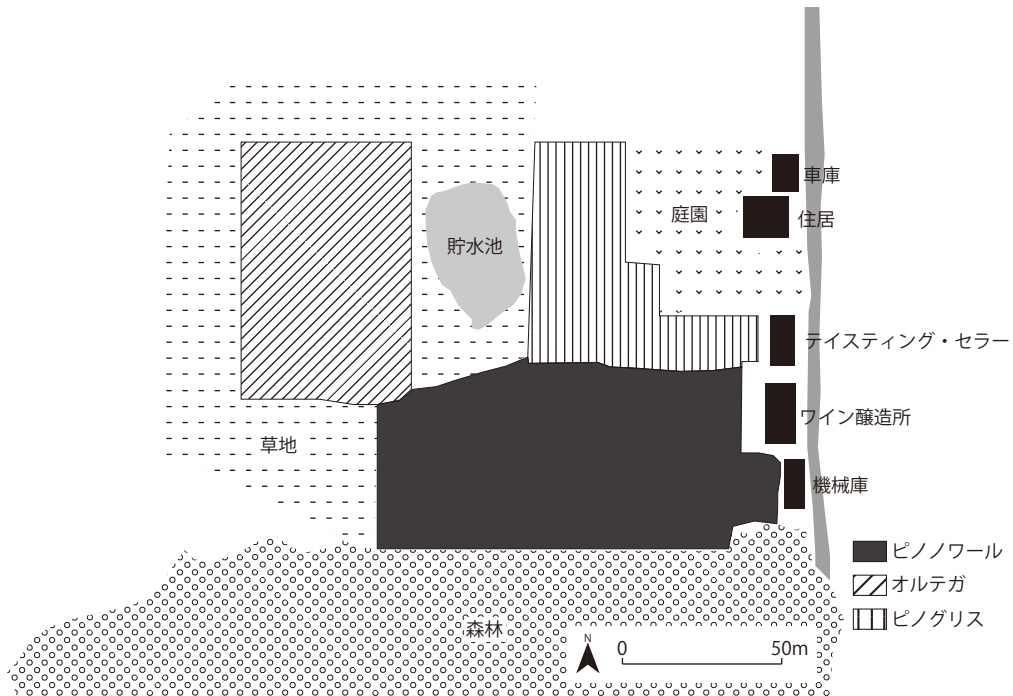


図7 カナダ・バンクーバー島のカウチンバレーにおける小規模ワイナリー（Rワイナリー）と農場の土地利用（2015年6月）

（現地調査により作成）

ウを植栽してワイナリー経営を開始した。実際にワイン醸造が行われるようになったのは2009年からであり、経営者がブドウ栽培からワイン醸造、販売までの一連の作業を担当し、妻はそれらの作業の補助しながら、家事や簿記を担当している。

Rワイナリーとその農場の土地利用を図7に示した。これによれば、農場で栽培されているのは赤ワイン用のピノノワールと白ワイン用のピノグリスとオルテガであり、中規模ワイナリーよりもさらにブドウの栽培品種が限定されている。R氏の農場では他のワイナリーのブドウやワインと差別化を図るため、ブドウが無農薬・無化学肥料で栽培されている（図8）。R氏は防虫防除や地力維持を容易にするため、牧草地を基盤にしてブドウを植栽しブドウ樹木の維持管理を草生法で行って



図8 カナダ・バンクーバー島のカウチンバレーにおける小規模ワイナリー（Rワイナリー）の有機栽培のブドウ園

（2015年6月菊地撮影）

いる。これは、R農場がもともと牧羊農場であったことを上手く利用した方法であり、緩傾斜地の土壤浸食を抑制する方法でもある。これらのブド

ウで醸造されたワインは有機ワインとして特徴あるものとなり、カウチンバレーのオンリーワンのワインとして購入を希望する来訪者が多い。小規模ワイナリーの多くはツアーを受け入れることもないし、試飲もあまり実施していない。しかし、Rワイナリーは4月から9月中旬までツアーを受け入れるとともに、試飲も実施しており、それらを通じてオンリーワンのワインを売り込んでいる。

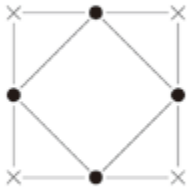
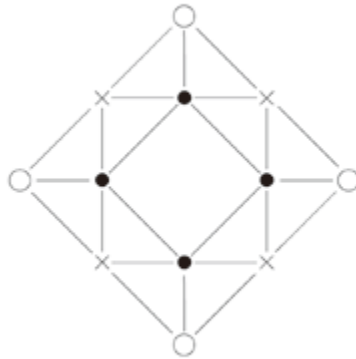
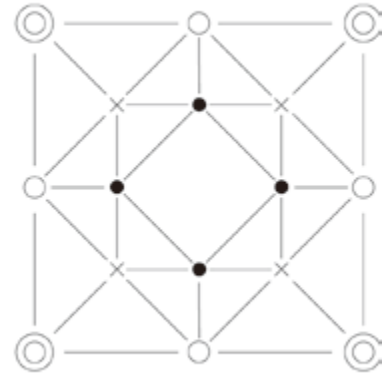
Rワイナリーのワインの販路はカウチンバレーとビクトリア都市圏に限定されており、生産量の約40%は直接販売であり、残りはダンカンの特約小売店やレストランへの販売（約40%）とファーマーマーケットでの販売（約20%）である。Rワイナリーのワインは有機ワインとしてカナダ有機制度（COR）の認証を受けており、有機ワインだけを求めて来訪する顧客も少なくない。しかし、小規模ワイナリーも中規模ワイナリーと同様に、一つのワイナリーだけで来訪者が満足することはない。そのため、ワイナリーとワイナリーの組み合わせに基づくワイナリー巡りや、ワイナリーと他の商品生産の農場や異業種との結びつきが重要になる。Rワイナリーの来訪者の多くは健康志向が強いため、有機ワインと有機乳製品や有機野菜などとの組み合わせが重要になり、ワイナリーと有機農産物の生産農場とを組み合わせたツアーも多くなっている。

Rワイナリーを典型例とする小規模ワイナリーは、経営者家族の自己実現の結果として位置づけられ、経済的利潤よりも非経済的利潤が優先されている。そのため、小規模ワイナリーはこだわりや趣味的要素の強いワインを中心に醸造するようになり、Rワイナリーの有機ワインのようにオンリーワンのワイン生産で特徴づけられるようになる。

IV カウチンバレーにおけるワイナリーの発展とその地域的効果 ―むすびにかえて―

カウチンバレーの16のワイナリーは、大規模なものの中規模なもの、および小規模なものに類型化できるが、大規模であっても小規模であっても一つのワイナリーとして顧客を維持し、生産したワインの販路を拡大することは容易なことではない。そのため、カウチンバレーのワイナリーの多くは複数のワイナリーと連携することで、あるいは複数の他の商品生産農場と連携することで、ワインの生産維持や販路拡大を図ってきた。このようなワイナリー同士の結びつきや、ワイナリーと他の商品生産農場との結びつきのモデル的状况を図9に示した。このモデルの構成要素は大規模から小規模までのワイナリーと、カウチンバレーのワイナリー以外の商品生産農場である。ここでの商品生産農場には、新規就農者の野菜農場や果樹農場、および既存の酪農場や牧羊農場や馬産農場が含まれている。

図9のa)によれば、1次的な農村空間の商品化は小規模ワイナリーと他の商品生産農場との結びつきにより構築されている。小規模ワイナリーではオンリーワンのワインが醸造され販売されるが、ワイナリーそれ自体のアトラクションはほとんどない。そのため、一つの小規模ワイナリーはいくつの特徴ある小規模ワイナリーと組み合わせることにより来訪者を引きつけることができ、小規模ワイナリーを結びつけたワインツーリズムが農村空間の商品化に大きく貢献することになる。さらに、小規模ワイナリーはオンリーワンの商品生産を目指す小規模農場、例えば野菜生産や果樹生産の農場と結びつくことにより、農村空間の商品化はさらに大きく展開する。特に、カウチンバレーでは地元食材を用いた「食」文化を推奨するスローフード運動が盛んであり、小規模ワイナリーと他の商品生産農場との結びつきは農村空

a) 1 次的な農村空間の
商品化b) 2 次的な農村空間の
商品化c) 3 次的な農村空間の
商品化

●小規模ワイナリー ○中規模ワイナリー ⊙大規模ワイナリー × 他の商品生産農場（酪農、果樹、野菜など）

図9 カナダ・バンクーバー島のカウチンバレーのワイナリーを中心とした農村空間の商品化モデル

間の商品化にとって基礎的な単位となっている。

カウチンバレーの中規模ワイナリーも栽培するブドウ品種を厳選し、質の高いこだわりのワインを生産している。そのため、一つのワイナリーにおけるワインの種類は限定され、顧客の拡大には限界がある。そのため、中規模ワイナリーも小規模ワイナリーと同様に他の中規模ワイナリーや小規模ワイナリーと組み合わせられることにより、多くの来訪者を引きつけることができ、販路を拡大させることができる。図9のb)に示した2次的な農村空間の商品化は、中規模ワイナリーを取り込んだモデル的状况を示している。これによれば、中規模ワイナリーも中規模ワイナリーや小規模ワイナリー、および地元の他の商品生産農場と結びつき、スローフードの集積の利益やワインツーリズムの回遊効果によって経営の安定化が図られている。実際、中規模ワイナリーのワインは地元農産物を扱うレストランに特約販売されている。このことから、地元農産物の生産農場と地元ワイナリーの結びつきがスローフード運動に基づいて農村空間の商品化に寄与しているといえる。

カウチンバレーの大規模ワイナリーは多種類のブドウを栽培し、多様なワインを生産するだけでなく、レストランや農場内のツアーなど来訪者を満足させるアトラクションを備えている（図10）。大規模ワイナリーでは飲む、食べる、過ごす、癒される、買うなどの一連のアトラクションが一つのワイナリーでほぼ完結するため、他のワイナリーと結びつく必要がない。しかし、カウチ



図10 カナダ・バンクーバー島のカウチンバレーの大規模ワイナリーで設定されている農場内ツアー

（2015年6月菊地撮影）

ンバレーの大規模ワイナリーは小規模ワイナリーによる1次的な商品化の組み合わせと中規模ワイナリーによる2次的な商品化の組み合わせと結びつき、図9のc)に示したような3次的な農村空間の商品化の結びつきを構築し、来訪者や販路の広がりを確かなものになっている。

このような形で小規模ワイナリーから大規模ワイナリーまで結びつくことにより、カウチンバレーのワイン産業のブランド力が高まり、1990年代後半に台頭するようになったワイン産地の競争力を強化することにもなった。さらに、ワイナリーと地元農産物の生産農場とが結びつくことは、スローフード運動を核とする農村空間の商品化にも寄与することになった。また、小規模ワイナリーから大規模ワイナリーまでの結びつきや地元農産物の生産農場との結びつきは、毎週日曜日に開催されるダンカンやビクトリアのファーマーズ・マーケットの来店を契機にしており、ファーマーズ・マーケットが農村空間の商品化に果たしてきた役割は少なくない。いずれにしても、カウチンバレーのワイナリーは新規就農者の農場購入とワイン生産や農村居住への憧れからはじまり、経営者のワイン生産のこだわりや情熱によって地域の農村空間の商品化の核となる存在となった。

【付記】

本研究の骨子については地理空間学会第21回例会（日本大学文理学部）において発表した。現地調査に際しては、Cowichan Valley Regional DistrictにおけるBusiness Development OfficerのKathy Lachman氏やMarketing CoordinatorのCathy Mailhot氏、およびCowichan ValleyのWineryやVineyard農場の多くの方々に多大なるご協力を賜った。なお、この報告のための現地調査において、平成26・27年度科学研究費補助

金基盤研究(B)「カナダにおける農村空間の商品化による都市－農村共生システム構築の実証的研究」(研究代表者：田林 明，課題番号：26000032)による研究費の一部を使用した。以上を記して感謝申しあげる。

文 献

- 田林 明・菊地俊夫・松井圭介編 (2009):『日本農業の維持システム』農林統計出版。
- 田林 明編 (2013):『商品化する日本の農村空間』農林統計出版。
- 田林 明編 (2015):『地域振興としての農村空間の商品化』農林統計出版。
- 山本正三・田林 明・菊地俊夫編 (2013):『小農複合経営の地域的展開』二宮書店。
- Cloke, P., Marsden, T. and Mooney, P.H. (2006): *Handbook of Rural Studies*. SAGA Publications.
- Cowichan Region Economic Development Commission (2010): *Cowichan Region Area Agricultural Plan*. Cowichan Valley Regional District.
- Croce, E. and Perri, G. (2010): *Food and Wine Tourism: Integrating Food, Travel and Territory*. CABI Publishing.
- Dougherty, P.H. (2012): *The Geography of Wine*. Springer.
- Essex, S.J., Gilg, A.W. and Yarwood, R.B. (2005): *Rural Change and Sustainability: Agriculture, the Environment and Communities*. CABI Publishing.
- Hall, C.M., Sharples, L., Camboume, B. and Macionis, N. (2000): *Wine Tourism around the World*. Routledge.
- Hynes, G. (2011): *Island Wineries of British Columbia*. Touch Wood.
- Ministry of Agriculture and Lands (2008): *Cowichan Valley Regional District Agricultural Overview*. British Columbia.
- Ministry of Agriculture and Lands (2013): *Agriculture in Brief, Cowichan Valley Regional District*. British Columbia.
- Robinson, G.M. (2004): *Sustainable Rural Systems*. Ashgate.
- Torres, R.E. and Momsen, J.H. (2011): *Tourism and Agriculture: New Geographies of Consumption, Production and Rural Restructuring*. Routledge.
- Wood, M. (2005): *Rural Geography*. SAGA Publications.

Development of Wineries and its Impact on Rural Commodification of Cowichan Valley in Vancouver Island, Canada

KIKUCHI Toshio *, KANEKO Jun **, TABAYASHI Akira ***,
NIHEI Takaaki **** and WALDICHUK Tom *****

* Graduate School of Urban Environmental Sciences, Tokyo Metropolitan University,

** Faculty of Law and Letters, Ehime University, *** Professor Emeritus, University of Tsukuba,

**** Graduate School of Letters, Hokkaido University, ***** Faculty of Arts, Thompson Rivers University

This study reveals the development of wineries and its impact on rural commodification in Cowichan Valley in Vancouver Island, Canada. Wineries of Cowichan valley (total of 16) could be categorized as large-scale, medium-scale and small-scale wineries by the vineyard acreage. Mutual interdependency among wineries from small-scale to large-scale has largely impacted on its strong brand image and competitiveness in wine production regions through the development of wine tourism. Further, interconnections between wineries and local farms have resulted in the slow-food movement and the development of rural tourism, which could be identified as the core to the expansion of rural commodification. Weekly held farmers' market has played a key role in creating close interactions between wineries and farms. Wineries of Cowichan valley originated as result of farmland acquisitions and wine productions by new farmers who longed for a rural and agricultural life. Their strong preferences and passion for wine and networking has triggered the commodification of rural space in the area.

Keyword: Cowichan Valley, commodification of rural space, new farmers, large-scale winery, medium-scale winery, small scale winery